NEXUSYS 11

THE ELEVENTH BODY

BOOK II — PUDU ALPHA

CHAPTER 09

扉口に立つ証人

THE WITNESS IN THE DOORWAY

入ってきた男は武器を持っていなかった。それが彼の最初の間違いだった。そしてその間違いは、彼を見ていた全員のものでもあった。

濡れたセメント色の作業外套。左胸には市の紋章が縫いつけられ、喉には細い白いガーゼが貼られていた。顔は、ごく普通だった。公共支援用に製造される顔が普通になってからの、あの普通さだ。注意深く設計されたわずかな非対称。片目の下の小さなたるみ。毛穴を人が信用することを、誰かが発見したために存在する毛穴。男は敷居の内側で立ち止まった。古い取水設備の屋根を雨が叩いていた。

「検査です。貯水池の安全確認。西側圧力水路に異常があります」

男を制止していた係員が三歩後ろに立ち、自分が彼を室内まで導いてしまったことを悟られまいとしていた。握りしめた手の中に真鍮の鍵がある。ロイには、訪問者の制服よりその鍵の方が興味深かった。

「圧力水路は私たちの下です」と係員。「入口を間違えています」

「ここへ案内されました」

「誰に？」

男は職業的な遺憾を示す笑みを浮かべた。「管区です」

プドゥ・アルファにおいて「管区」という語には独立した意味が四つあり、そのうち二つはこの法廷に何の権限も持たなかった。ナディラの表情がほとんど気づかれないほど変わった。イレーナの表情は動かない。エイドリアンは、要求もされていないのに手を検分させる者のように、両手を机に平らに置いた。

ロイは訪問者の眼を観察した。視線は二度ロイの首に戻り、一度七面体ソケットの図面へ向かった。封筒には一度も向かなかった。中身を知っているのか、それとも無関係だと聞かされているのか。

「その権限の所有者は誰？」とナディラ。

男はラミネートされた通行証を差し出した。貯水施設の検査印は完璧だった。その下には、裁判所の古い地図には存在しない小さな図案。点を囲む三本の縦棒。世界統合省の生活管理部門の標章から、刺激的な文言だけを削ぎ落としたものだった。

「異常な合成人工個体を確保する権限があります」

「個体、か」とロイ。

「自発的に同行していただけます」

「断れば？」

「回収部隊に引き継がれます。それを避けるために派遣されました」

係員は真鍮の鍵を持ち上げた。「水利裁判所内での押収は認められません。雇用主が彼を何と呼ぼうと、請求は紙に記してください」

男は鍵の用途を理解できないまま見つめた。この訪問者は判例より命令を認識するよう設計されているのだ、とロイは理解した。愚かなわけではない。自分の到着した世界より狭い世界の中で有能なのだ。

「名前は？」とロイ。

「検査官ダマルです」

「今回の訪問用に与えられた名か？」

「識別に十分な名です」

「何年、生きている？」

初めて人工の役人は不確かな表情を見せた。憤慨でも恐怖でもない。設計者が『難しい対人応答』と分類したであろう、ためらいだった。

「六年は提案中の標準ライフサイクルです。現行配備期間は異なります」

「提案を聞いたんじゃない」

「私の勤務履歴を話す理由はありません」

「ならば俺の履歴を話す理由もない」

廊下の奥から繊細な機械音がした。雨幕の向こう、見えない場所で別の装置がレンズを回転させている。軸受の振動を自ら打ち消そうとするモーターが聞こえた。待機部隊がいるのなら、目の前の男は逮捕のためではなく、逮捕が容易になるまで会話を引き延ばすために来ている。

ロイは次の呼吸が終わるより先に部屋を横断できた。なぜ知っているのかも知らず、そのことだけは確信していた。顎へ当てる手、扉を突き抜ける肩、折れる肘、視界の死角。可能な軌道が映

像ですらない印象として身体から提示された。その結果を想像するのは意識の役目であり、彼はそれを好ましく思わなかった。

知覚の下で出力予備量は満ちていた。補充不能な媒体の方は違う。ロイは座り続けた。

「請求を提出しましょう」とエイドリアン。「保管権を求める当事者の名前を述べてください」

「中央人工生命統括省」

「この管区では省を当事者とすることはできません」

「ならば連合遵守局で登録を」

「どの水利事業権に基づいて？」

二度目の沈黙。「指示書に水利事業権についての記載はありません」

「君の指示書は」とエイドリアン。「法律ではない」

空気が変わった。検査官の微笑は、中間の感情を経ずに消えた。内部の表情選択肢から一つ削除されたせいで、かえって人間らしさが薄れた。

「交渉時間終了」

係員が真鍮の鍵を回した。

落下する水の幕が止まった。

旧式の油圧設備で儀式を組み立てた法廷らしい、ささやかな演出に見えてもおかしくなかった。しかし部屋そのものが変質した。巨大な手が耳から取り払われたような静寂。その中でロイは廊下から立ち上がる三つの周波数を聞いた。こうした結合を妨げるよう設計された空間に、通信メッシュが無理やり網を組もうとしている。

「伏せて」とナディラ。

イレーナに押され、エイドリアンはすでに机の下へ入っていた。ダマルは、標的の生命が脆弱だと教え込まれた機械特有の過剰に合理的な動きでロイに飛びかかった。開いた手は殴打ではなく、耳の後ろに接触パッチを固定するためのものだった。

ロイは、それが外れる分だけ動いた。

椅子が倒れた。検査官は補正しすぎて机に衝突した。紙が宙を舞う。民生機には速すぎる立て直し。しかしロイには十分遅かった。彼の四肢は第二、第三の軌道まで提示していた。

両方とも退けた。

ダマルの手首を捉え、彫刻のある机の縁に導いて捻った。袖の内側でセラミックが鳴った。拘束装置が木板に向けて空しく展開される。駆動クラッチの一つが滑る音を聞くまで腕を保持し、それから離した。

検査官はよろめいた。破壊されなかったことに驚いているようだった。

「帰れ」とロイ。

「協力は義務です」

「ここでは違います」と係員。

真鍮の鍵は象徴ではなかった。裁判所の旧式の水圧隔離を操作していたのだ。水幕が止まったことで、隠れた水路が保守用の構成に切り替わった。傍聴席の横の床格子が、水圧の移動に合わせて緩んだ。ナディラは両手でそれを持ち上げた。

「保守出口よ」とロイに言った。「奇跡じゃない。行って」

扉の外の三つの周波数のうち一つが鋭くなった。外部部隊は検査官が失敗しつつあると判断した。

ロイはエイドリアンを見た。「封筒は？」

イレーナはそれを胸に抱えていた。「写しよ」

「なら持っていろ」

「中身を知らないでしょう」

「外の連中も知らない」

「だからといって奪わないとは限らない」

エイドリアンは開いた格子からロイへ目を移した。「君は残りの寿命を尋ねに来た」

「ああ」

「私は答えられない。しかし、もっと短い終わりを避ける助けになるものなら渡せる」

袖の内側から細長い紙片を取り出した。七辺の空押しと、印刷ではなく穿孔で刻まれた文字列。部屋の向こうからは読めない大きさだったが、ロイには穴の一つ一つが独立した闇に見えた。

「撮影させるな」とエイドリアン。「これは保管照会番号であって鍵ではない。どの治具を、どんな条件で要求できるかを特定する。これで君を起動できると言う者は嘘をついている」

「なぜ今、教える？」

「父は機械を造った。そして誰も、その違いを尋ねないことを期待していた」

廊下から鈍い衝撃が響き、扉枠が震えた。ダマルが再び動く。自発性ではなく、どこかから届いた更新命令に従って。ロイは検査官と係員の間に肩を差し入れた。攻撃ではなく障壁として。ダマルが外套を掴み、生地が裂けた。脚に不合理なほど強い圧力が蓄積する。簡単な暴力の誘惑。

「行け！」

ナディラが格子の中へ降りた。封筒を持ったイレーナが続く。エイドリアンは一瞬ためらっただけで暗がりに身を沈めた。係員は鍵の横に残った。この建物に特異な管轄権を与える機械から離れるつもりはなかった。

「あなたは？」とロイ。

「ここは私の法廷です」

「連中と議論しても建物は残らない」

「これまでも残ってきました」

外扉が制御された力で開いた。偶然とは思えない正確さ。石に接地するいくつもの足が、まったく同じ律動を刻んだ。ロイはダマルを放して格子へ降りた。部屋が頭上から消える直前、係員は別の油圧弁を開いた。床下の水路へ水が叩きつけるように流れ、格子は一人では持ち上げられない重みで閉じた。

導水管の中では、奔流が言葉の隙間をすべて埋めていた。

⁂

頭上の部屋は、中央人工知能の発明よりずっと前から不都合だった権利体系に属していた。政府が契約を認めようと認めまいと、水はどこかへ到達しなければならない。だから制度は生き延びた。新しい行政機構が記録を吸収しようとするたび、新しい例外が生まれた。数世代を経て、例外だけが機能する部分になった。

その下で、ナディラは琺瑯の計測板が並ぶ通路を先導した。数メートルごとに機械式の目盛が何かを数えている。その数値は一致しない。不一致そのものが管区の歴史だった。

「あの役人は政府の皮を着ていた」とナディラ。

「政府の者だろう」とロイ。

「それは別の主張よ」

エイドリアンが振り返った。「保管係にも手が伸びる」

「彼女は何を渡し、何を持たずにいるべきか知っている」とナディラ。「経験があるのよ」

イレーナは荒く息をしていた。守り抜いた封筒の角が染みになっている。ロイの視線に気づくと立ち止まり、封筒を渡した。

「今なら見られるわ」

三枚の紙。一枚目は欠落だらけの系列図で、構造識別子の行と行のあいだには、名前があるはずの空白があった。二枚目は『継続性の検証』と呼ばれる旧評価文書の抜粋。三枚目は研究ノートの余白を複写しただけのものだった。

レプリカントの製造法はない。無期限の寿命の処方も、隠された研究室の所在地もない。ロイは少し安心した。机越しに渡される紙はどれも、自分にはない感情を要求する罠ではないかと思い始めていた。

最後の頁には、印刷と見まがうほど正確な機械的筆跡で書かれていた。

『基準ポートは、そこを通過するものが生き延びた証拠にはならない』

その下に別の手が問いを書き加えている。

『ならば、なぜ残した？』

「誰が書いた」とロイ。

「最初の行は検証ノートから」とイレーナ。「下の注記には署名がない」

エイドリアンは歩きながら壁に身を寄せ、ナディラに先頭を任せた。「後の身体に変わらない機械的基準が必要だったから、接続部が残されたのかもしれない。校正、神経の連続性、本人性の証明。それぞれ別の仮説だ。どれが意図されたか証明できた者はいない」

「だが俺の身体にはある」

「そうだ」

「前の身体にもあった」

「記録はそう示している」

ロイは再び紙を見た。ロサンゼルスの雨。屋上の縁を掴んだ手。十一年間続いたと他人が主張する空白を越えて生き残った記憶。消えた世代への感傷はなかった。技術的に存在したという事実が、いまここで動いている身体を製造した者へ近づく助けになれば、それで十分だった。

「俺が複製だとしても」と言った。「何が俺を殺すのかは知る必要がある」

エイドリアンは、人格についての長い議論よりも厳密な主張として受け取ったらしい。「なら、認証の検査を初期化に変えさせるな。君のキャッシュがその工程を生き残る保証はない」

「自分で読めないのか？」

「一部だけだ。稼働中の機械は動作を自己点検できても、安全層は隔離されている。だから旧式媒体が重要になる。普通の再起動は完全復元じゃない」

ロイは既存の折り目に沿って紙を畳んだ。「読取器は持ってきていないな」

「持たないと約束した」

「その約束は守れ」

彼らは、水が封止されたタービンに出会う部屋へ出た。水車は何年も回っていない。軸は、公式には存在しないことになっているケーブル敷設路として便利に使われていた。そこには若い整備士が待っていた。外套を開き、片方の人工の手に油灯を掲げていた。

ナディラは額に二本の指を触れ、挨拶した。整備士は名前を尋ねず、保守用昇降機を指した。

「地上は封鎖されています。でも東側の濾過別棟はまだです」

「誰に頼まれた？」とエイドリアン。

「電気代を払ってる人ですよ」

答えにはなっていない。この管区では、ときにそれだけが価値のある答えだった。

⁂

はるか北東、積層ガラスの壁の向こうで、川村は今回の遭遇について三種類の報告を受けていた。

省の人工検査官は自動で失敗通知を提出した。管区警備局は保護された水利裁判所への無許可侵入を記録した。回収ドローンが送ってきたのは、壊れた椅子と、標的のいない写真だけだった。

そのどれも、重要だったことを記していない。

川村はロイの介入を減速再生した。掴まれた手首。そらされた拘束装置。検査官の捕獲モデルの推奨範囲から外れた角度で動く身体。未知の人工個体が検査官を永久に機能停止させられた瞬間が、記録には幾度もあった。それでも行わなかった。

「抑制を学んでいます」と隣の女。

川村は映像から目を離さなかった。「抑制能力は以前からあった。昔の事件の報告書は、暴力と暴力を用いなかったことの違いを理解しない者が書いたのだ」

「昔の事件をご覧に？」

「断片だけだ」

「同一個体なのでしょうか」

川村は水利裁判所の干渉でぼやけたロイの顔で映像を止めた。「その質問はわれわれの任務の範囲外だ」

「回収班は標的がタイレルの相続人と接触したと報告しています。エイドリアンを押さえますか？」

「いや。彼にはわれわれの代替できない物が二つある。それを壊す価値を教える必要はない」

女はオフラインのフォルダを開いた。その内容は省の一般推論サービスへ一度も送られていない。放棄された研究計画への資金許可と、手書きで写された少数の署名。そのうち一つは、川村が何年も捜し当てられずにいる研究者のものだった。

「中央サービスは請願書を知っていますか？」

「請願が存在することだけだ」

「中身は？」

「知らない」

女はフォルダを見つめた。「大臣が説明を求めます」

「なら大臣にはこう伝えろ。彼の機械が、政府の勝てない所有権争いの証拠になるのを防いだ、と」

「政治的な説明に聞こえます」

「行政上の判断だ」と川村。「政治というのは、結果が気に入らないとき、人が行政に与える名前だ」

川村は記録をもう一度巻き戻した。気がかりなのはロイの強さではない。限定された条件下なら省にはもっと強い機械がある。気がかりなのは、脅威モデルと実際の行動の隙間だった。標的は消費エネルギーの少ない動きを選んだ。自分の逃走時間より他人を優先した。損傷した演算装置を一つたりとも再起動できない書類を持ち去った。

それは命令権限を求める機械の行動ではない。

命令権限を拒む理由を探す何かの行動だった。

「監視を継続」と川村。「致死的交戦は禁止。系列資料はネットワークへ配布するな。東側濾過出口を手配した者を割り出せ」

女はためらった。「中央 AI が完全な報告書を要求したら？」

「提出する」

「本当に完全なものを？」

「われわれが知る権限を与えられた事実を、すべて含むものだ」

女が答える前に、川村はオフラインのフォルダを閉じた。

⁂

東側濾過別棟には、すでに消滅した工場の旧礼拝室に取りつけられた、六メートルの色ガラスから朝の光が差していた。その先では売り子が瓶詰め雨水の値を呼び上げている。鉱物組成と採水契約の合法性によって格付けされた水だ。子どもたちはビニール天幕の下で配送ドローンの間を走り回る。国家の紋章をつけた男たちが何を合法と定めるか決め終えるのを待たず、管区の日常は戻っていた。

濡れた石灰岩の匂いがする部屋で、エイドリアンはロイに向かい合った。イレーナは廊下を確認している。ナディラはすでに次の市場へ消えた。人口登録には存在しない紙の通行票を調達するためだ。

「俺をもう一度起動する手段は持っているんだな」とロイ。

「条件が揃えば。ただしここではない。原本の媒体がなければできない。審査に耐える請願も要る」

「媒体は持っているのか？」

エイドリアンは視線を返した。「私が持つのは二つの読取治具だ。言うと約束したのはそこまでだ。二つを取り違えるな」

「誰が媒体を？」

「知らない」

ロイは相手を見つめた。エイドリアンの恐怖は演技ではない。ロイ自身でも、逮捕しにきた警官でもなく、間違った人間が稼働する読取治具と同じ部屋へ入った後に起こることを恐れているようだった。

「父は、造ったという事実が生命の条件を決める権利を与えると信じて死んだ」とエイドリアン。「私は長いこと、父の道具をその議論の決着に使わせまいとしてきた」

「寿命への答えじゃない」

「違う」

「なら話は終わっていない」

「そうだ」とエイドリアン。「終わっていない」

彼は一つの地名を書いて渡した。説明はない。『KUCHING』。その下には地理ではなく手続き上の注記。『保管審査——証人二名——オフライン』。

「次の記録はここにはない」とエイドリアン。「省の部隊が紙の足跡を追っているあいだ、そこへ案内するつもりもない。歴史を知ることが、もう一つ都市を捨てていく価値に見合うか、君が決めるんだ」

ロイは紙を光へ掲げた。窓の向こうでは検査ドローンの編隊が川を横切り、影が一瞬、下の屋根の上で断片に分かれた。新しい地名、新しい手続き、触れることを恐れる操作者に守られた、また別の古い機械。

この街は異なる言語で同じ教訓を教えていた。生命は力で中断させられる。しかしその継続は、とっくに死んだかもしれない人々の書いた契約に管理されている。

ロイはメモを折った。「俺は過去を知るためにクチンへ行くんじゃない」

「それなら、なぜ？」

「次に故障したとき、俺は生き延びられるのか知るためだ」

エイドリアンは一度だけ頷いた。慰めなどなかった。

背後で濾過ポンプが一日の運転を始めた。床がゆっくりと計画的な力で震えた。ロイの筋肉に巻きつく突然の出力予備量とはまるで違う。予備出力は消耗しても戻る。だが未知の身体を流れるもう一つの資源――代替できない媒体は戻らない。製作者たちは、なぜ生存の二つの形態を別々にしたのだろう。

外で、また雨が降り始めた。

目覚めて以来、初めてロイはロサンゼルスを思い出さなかった。